

「愛」の一断面をみる

—「伊勢物語」24段と、
「イノック・アーデン」を通して—

丸 山 和香子

I はじめに

西暦900年代の中頃、日本で生まれた「伊勢物語」の24段と、1800年代の中頃、英国の詩人、テニソンによって書かれた物語詩“Enoch Arden”についてのべようと思う。

英詩「イノック・アーデン」を散文化した retold 版で、この作品に初めて出会ったのは、筆者が高校のはじめのころであった。自己を犠牲にして愛をつらぬく純粹さや、苦しみ、その苦しみに耐えうる人間性の高潔さに感銘をうけたのを覚えている。日本の古典「伊勢物語」を読んだのは、大分たってからであった。その中の24段を読んだとき、日本の古典にも、「イノック・アーデン」の主題と同種のものがあることを知り、愛には国境はなく、人間が存する限り、人間と共に存することを感得した。

およそ文学というものは、思想や感情を言語で表現した芸術であり、各国民は固有の言語で、固有の思想や感情を表現したものといえる。しかし、それぞれの国民に固有のものと思われる思想や感情には、その奥に共通の要素が存しているのを認めざるを得ない。特に、愛とか美の領域では、時間的空間的距離をこえ、人の心に訴えるものがある。だからこそ、私たちは、文学についていえばその表現手段である言語の種類とは関係なく、原語で又は翻訳で、種々の作品に接し、心に訴えるものをもつ作品を愛し、その作品を残し続ける。

前記の二書も若い私に多大の感動を与えた。この感動は私個人のものであろうと、長く心に秘めていたが、昨年某短大で「伊勢物語」を一般教育の「文学」の授業のテキストとし、最後に、伊勢物語全篇から、もっとも感動をうけた段を選び、鑑賞文を書かせたところ、受講生370名中、164名が、この24段をあげたのであった。これは、私にとって大きな驚きでもあった。最近の私自身の関心は惟喬親王とある男の親交、あるいは、ある男が死期の近づくことを感じて詠

んだという二首の歌の方にあるので、この学生の反応に接し、久しく忘れていたものを呼び戻される思いがした。「伊勢物語」の24段のもつ魅力は、この物語が世に出てから1000年余った現在でも薄れてはいない。学生の心を引きつけたもの——それは時を超え、空間を超えて、人間の心に訴えるその作品に内在する何かであるにちがいない。その何かが、どのような手法で私たちに訴えてくるのかを少しでも明らかにしたい。そして私自身が抱き続けていた「イノック・アーデン」のもつ魅力と比較してみたい。

今まで「伊勢物語」について、また「イノック・アーデン」について願しい量の研究書があり、すでに文学史上での評価は定まっているように見える。しかし、ここでは作品そのものに、じかに向きあいその訴えを受けとめていきたい。

Ⅱ 「伊勢物語」24段

都に上った夫を三年待っても帰らないので、女は他の男と結婚しようとした。その結婚の約束の夜、突然帰って来た夫は、新しい夫婦の幸せを念じて立ち去った。女は前夫への断ち切れぬ愛情から、そのあとを追ったが追いつくことができず、清水のほとりで絶命するという話である。短いので本文をあげておく。

むかし、男、かた田舎に住みけり。男、宮仕へしにとて、別れ惜しみてゆきけるまゝに、三とせ来ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、今宵あはむとちぎりけるに、この男きたりけり。「この戸あけ給へ」とたたきけれど、あけて、歌をなむよみていだしたりける。

あらたまの年の三とせを待ちわびて

ただ今宵こそ新枕すれ

といひいだしたりければ、

梓弓ま弓つき弓年をへて

わがせしがごとうるはしみせよ

といひて、いなむとしければ、女

梓弓ひけどひかねど昔より

心は君によりにしものを

といひけれど、男かへりにけり。女いとなしくて、後にたちて追ひゆけど、え

追ひつかで、清水のある所にふしにけり。そとなりける岩に、およびの血して、書きつけける。

あひ思はでかれぬる人をとどめかね

わが身は今ぞきえはてぬめる

と書きて、そこにいたづらになりけり。

(注1)

この24段は三つの場面から成る。

- 1) むつまじい夫婦の別居、三年間の無音ののちの女の再婚の決意まで
- 2) 再婚の夜、前夫が帰って来て歌の贈答をする場面
- 3) 去っていく前夫を追ってついに死ぬ女の最後の場面、である。

田舎でむつまじく暮らしていた夫婦は、苦しくなった暮らしむきの為か、別居を余儀なくされる。夫は都へ働きに出たのである。《別れ惜しみて》(注2)という短い表現の中に、どちらにとってもつらい別れであったことが想像される。一人残された女は、どんなにか心細い思いに耐えたであろうか。三年間、一度の便りもなく、消息も耳に入らなかった。そんな女の不安な生活をみかね、その女に心を寄せる男が現われても不思議はない。《いとねんごろに》真心をもって女の世話をしようとした。女は三年間は待つてほしいといったであろう。男もその日の来ることを、どんなにか辛抱よく待ったことであろうか。ついに夫の帰還をあきらめ、女はこの真心ある新しい男との再婚を決意した。再婚の約束をはたすその晩、突然前夫が帰って来たのである。

場面は急に変転する。戸をたたく音、《この戸あけ給へ》という声こそ、三年間待ち続けた夫の声であった。一瞬のうちに女の胸中にはさまざまな思いが交錯したであろう。ようやく迎え入れた目の前にいる親切な男、この人をつらい目にあわせてはいけない。だが外には三年間待ち続けたあのいとしい夫がいる。女は咄嗟に歌を詠んだ。

《あらたまの年の三とせを待ちわびて

ただ今宵こそ新枕すれ》

地の文には女の心の動きを説明する言葉は一つもない。その心の動きは、すべて読者の想像にまかされている。そしてこの歌が、この歌のみが、女の心情をおし

はかることのできる唯一のものである。（三年間というもの、朝ごとに、夕ごとに、事あるごとに、お帰りを待ち続けていました。期待と失望のくり返してした。私にとっては、長い長い三年でした。とうとう決心して今夜再婚するのです。）女は、自分のあとにひくことのできない事情を、力の限り歌い出した。三年という年月を長いという人もいるだろう。三年待ったのだから、もう少し待てたらうにという人もいよう。他人はいろいろにいえる。しかし、日日の暮しの心細さ、誠の心をもって求婚している人への返事をそれほど先へのばすことはできない。この三年という年数は、当時戸令（注3）で女の再婚を認めた年月であり、男だってこの時を一つの目安としていたにちがいない。《としの三とせを待ちわびて》という《待ちわびて》と、《ただ今宵こそ》の《ただ——こそ》のわずかな言葉に、せっぱつまった女の叫びが聞えるようだ。制限された31文字の中の《待ちわびて》《ただ…こそ》という5文字、4文字であるからこそ、この言葉は万金の重みをもって迫り、また生々しい光を放っている。

夫は事情をさした。夫の心の動きの説明など一切ない。夫の詠んだ歌にすべてが託されているのは、女の場合と同じである。

《梓弓ま弓つき弓年をへて

わがせしがごとうるはしみせよ》

夫は、妻の詠み出した歌を聞き、一瞬わが耳を、わが目を疑ったであろう。事情を悟ったとき、驚き、怒り、とまどい、悔恨、羨望などが胸中を駆けめぐったにちがいない。かつて二人ですごした安らぎの日日の光景が男の眼前にあらわれては消える。すべてをあきらめねばならぬことを知ってうちのめされる。その絶望の極みから、かつての自分の幸せを、新しい男にいさぎよくゆずろう、それが愛しい妻への自分のできる唯一のことなのだと決意する。夫はこの決意を歌の末部にすえている。《わがせしがごとうるはしみせよ》この妻へおくる最後となることばは、夫婦であったものでなければ、決して出てこないことばであろう。（新しい夫を大切にせよ。おまえの選んだ道を必ず幸せにせよ。それでこそ自分の決意も無駄にはならない。）

この夫のとった行動についてもその理由をいろいろと想像できよう。三年も便りを寄さなかったのだから、妻への愛などなかったのだろう。いや、別の女をこ

しらえているのかもしれない。妻がこんなことになって、夫はむしろ喜んでいるだろう。妻を他の男へわたし、自分は心おきなく好きな女のところへ行けると。いや、皮肉をこめて、こんな歌を詠んだのだ、など。しかし、妻はそうには受けとらなかった。この事実がさまざまな憶測を消し去る。妻は、自分の心が前の夫にのみ寄りそっていたことを何としてもわかってもらいたい。何としても伝えたい。必死に詠み出したのが次の歌である。

《梓弓ひけどひかねど昔より

心は君によりにしものを》

この歌の類歌は「万葉集」「古今六帖」「猿丸集」「続後撰集」などにもみられ、「伊勢物語」のこの場面の為に創られたものではない。しかし、この古歌がこの二人のやりとりの最後の歌としての働きを十分に果している。まるでこの場面に準備されたようだ。

夫の耳に達したかどうかなど地の文は一言半句もそえていない。女は去っていく夫のあとを追う。夫はふりかえることもなく女の目前から姿を消す。女は力つきて倒れてしまう。

《あひ思はでかれぬる人をとどめかね

わが身は今ぞきえはてぬめる》

自分の死を予期した、最後の愛のよびかけである。（思いあっても下さらないで、去っていってしまうあの人を、とどめることができないなんて、私はもう絶望のあまり生き続けることなどできはしない。）この生命をかけた愛のことばは、夫へというよりは、愛のたよりなさ、人の力の限界を知った悲痛な嘆きのようにさえ思える。《そこにいたづらになりけり》と地の文では女の死を、短く短くきりあげている。

この一段を通してみられる地の文の客観的描写の故に、男や女の心を詠み出した歌の感動はより一そう高められている。地の文に、しいて感情を表すことばをさがせば、《別れ惜しみて》と《女いとななしくて》の二部分のみである。また、夫についての説明は皆無、新しい男については《いとねんごろにいひける人》という説明があるのみである。三人のうちのどの一人をとり出しても、不幸な結末を予期される要素は何もない。大きな時の流れの中で、余儀なく一つの選択をし

たことから人の運命はあわただしく変化していく。そして三人はだれも幸せを成就できなかった。しかし、それぞれの場面での、一人一人の行為は、人の心をうつ。それは相手の立場を思いやることから生まれた行為であり、その行為を果たすには、自己を犠牲にしなければならないものだ。だが、その自己の犠牲も、自己の喜びに深く結びついている。人は、このような場面に直面したとき、このような行為をとりうる資質をもっているのではないだろうか。そこまで自覚していなくとも、そうありたいと思う切なる願いがあればこそ、この物語のこの段が感動を与え続けているにちがいない。

Ⅲ 「ノイック・アーデン」

物語詩「イノック・アーデン」は、イギリスの詩人。アルフレッド・テニソン（1809～1892）によって書かれた。テニソンはいわゆるヴィクトリア朝の代表的詩人である。テニソンのこの作品は、1864年、イギリスで発表され、日本でも1906年、入江花錦によって訳出されており、その七五調と、粉飾をまじえた訳の為に、非常に俗受けする作品として知られた。そのうえ、日本ではキリスト教の宣教師たちが、この作品を用いて愛の尊さや神のみ心について説教したため、文学作品としての評価がゆがめられていたといえる。いま、この作品をじっくり読んでいくと、その中には、人間の生き方、愛の貫き方に共感を覚えると同時に、人を傷つける愛の存在にも気がつく。今回は、「伊勢物語」24段の三つの場面に相当する部分を取り出し、比較してみたい。

物語詩「イノック・アーデン」は全部で、911行から成り、詩としてはかなり長篇とされている。冒頭では美しい自然の情景を描出し、この物語の主要な人物である三人の紹介をしている。原文を少し紹介しよう。行の左端の数字は原詩の行を示している。

- 10) Here on this beach a hundred years ago,
Three children of three houses, Annie Lee,
The prettiest little damsel in the port,
And Philip Ray the miller's only son,
15) And Enoch Arden, a rough sailor's lad

Made orphan by a winter shipwreck,

港きっての器量よし、まだ小娘のアニイ・リイと、粉屋のひとり息子フィリップ・レイと、船頭の息子で、その親は冬の難船ですでにこの世にいない孤児のイノック・アーデンというように、三人の人物の生い立ちがのべられる。三人は幼なじみであり、小さな波紋をときどき投げかけながらも楽しい無邪気な幼年期をすごす。やがて年ごろになり、アニイはイノックと結ばれる。フィリップの傷心はいうまでもない。アニイとイノックの間には子どもも生まれ、楽しいうちに七年の歳月は流れていく。しかし、イノックの思いがけない事故による負傷、病弱な第三子の誕生、イノックの休業による仕事の不振などで、家計は苦しくなる一方であった。働き者であるイノックをよく知っている船長が、救いの手をさしのべた。支那への航海に出る船の水夫長の役をたのんで来たのだ。危険を予感してアニイは夫の航海をやめさせようとした。だが、イノックは、愛する妻のため、子のためであるとアニイの反対をおしきって、出航するのだった。その別離までの事情は原詩157行から237行までを費し、二人の会話も交えてのべられている。

157) Then first since Enoch's golden ring had girt

Her finger, Annie fought against his will;

Yet not with brawling opposition she,

But manifold entreaties, many a tear,

Many a sad kiss by day by night renew'd

(Sure that all evil would come out of it)

Besought him, supplicating, if he cared

For her or his dear children, not to go.

He not for his own self caring but her,

Her and her children, let her plead in vain;

So grieving held his will, and bore it thro'.

くどいようだが、この部分を入江直祐氏の訳(注4)で再現しておく。

黄金の指輪をわが指に はめてもらったあの日から

今日初めて 夫に背いたアニイだった。

声を荒だてて さからったわけではないが、
色々と訴えたり頼んだり、涙さえとどまらず、
夜となく昼となく 悲しい接吻を繰り返かえたのも
旅先での様々な 災厄を案じてのことだった。
「もしも あなたの妻と子を いとしいものにお思いなら
どうぞ行かないで下さい。」と泣きすがってはみたものの、
「自分一人のためではない。いやいや、お前のため
お前と子供達を思えばこそだ。」と 心の奥ではつらかったが、
妻の言葉を聞きながし、かたく決心をまげなかった。

このように妻は懇願し、夫は説得し、二人はそれぞれの思いを言葉に託す。ついにイノックは自分の意志を貫き、別離はきまった。これも愛する妻の為、子の為と固く信じこんでいるイノックの気持をとがめることはできない。イノックは出発までの日日を、残していく妻のために、こまごまと準備する事に費やすのであった。この別離の決定から出発までの記述は、伊勢物語の《別れ惜しみて》別れいくのみの記述とは格段の差がある。

イノックが出航して間もなく、病弱な第三子は天へ召されてしまう。アニイは悲嘆のどん底に陥る。その上、留守中の生活の為に夫が用意してくれた商売も全くうまくいかず、アニイは悩み多い日々をおくることになる。かつての幼な友達であり、アニイを秘かに思い続けていたフィリップはついに意を決してアニイを訪ね、数々の援助を申し入れる。フィリップはアニイの自尊心を傷つけぬ様、港町の噂にならぬ様、注意深く援助を続ける。子供たちはフィリップ父さんといって彼をしたった。いつのまにか十年の時が流れていた。その間、イノックからの便りはおろか、消息すら誰の耳にも入っては来なかった。原詩では、270から358行までが、ここにあたる。

ついにフィリップはアニイに求婚した。その求婚の言葉を口に出す前にも、あたりの美しい自然の情景、かつてアニイとイノックが結ばれることを知って傷つき静かに身をひいたフィリップ自身の回想部分が美しく記されている。求婚に至るまでの叙述は用心深くすすめられている。アニイは迷った。フィリップの人柄

には心がひかれる。しかし、自分には二度もの恋はできない。

423) Can one love twice? can you be ever loved

As Enoch was? what is it that you ask?

'I am content' he answer'd 'to be loved

A little after Enoch.' 'O' she cried,

Scared as it were, 'dear Philip, wait a while:

アニイの悲痛な、誠実な叫びである。それに、夫が帰って来ないという根拠は何一つない。アニイはフィリップにあと一年待ってほしいと頼んだ。一年はまたたく間にすぎた。しかしアニイはまだきめかねていた。あと一と月、あと一と月待ってと返事をのばす。フィリップは、次のように答える。

459) Give her a month—she knew that she was bound—

A month—no more. Then Philip with his eyes

Full of that lifelong hunger, and his voice

Shaking a little like a drunkard's hand,

'Take your own time, Annie, take your own time.'

「何時までも、何時までも待ちますとも」とフィリップはアニイの決心のつくまで、辛抱よく耐えるのである。アニイの再婚の決意は、神への祈りに応えるかのような夢の中でのイノック死亡の暗示による。死して天上にむかえられているイノックの姿を夢みたのだ。アニイとフィリップは結婚した。フィリップの求婚からアニイの決心まで、原詩では359行から、505行までを費やしている。これに対し「伊勢物語」では、一人身になった女が再婚を決意するまでを《三とせ来ざりければ、待ちわびたるに、いとねんどろくにひける人に今宵あはむとちぎりたりけるに》と、簡潔に述べている。「伊勢物語」の簡潔な記述と「イノック・アーデン」の用意周到な記述とは全く対称的である。

「伊勢物語」では、二人の別離の間の事情を《三とせ来ざりければ》とのべているのに対し、「イノック・アーデン」では、船の難波、漂流先での様子などが、その他の自然描写を含めて523行から662行にかけてのべられている。ついに小舟に見出されたイノックは、かつて自分が出航した港へ帰って来た。まさきに、イノックは、七年間アニイと共にすごした我が家へむかう。そこに見たの

は「売家札」であった。イノックは妻の死や妻の再婚を予想した。彼の宿泊先の女主人からアニイの消息を聞いた彼は落胆した。だがその心の動揺を少しも外に出さず、じっと耐えた。今一度アニイの顔がみたい。そしてアニイの幸せを確かめたいと切望する。愛していればこそその人間の自然の情であろう。

ある日、思い出にさそわれるように、今アニイが住んでいるというフィリップの家へと近づく。足音をしのばせ中をのぞくと、楽しげな一家団欒の姿が目映った。明るく暖かそうな室内からは笑い声さえ聞えて来るようであった。覚悟はしていたものの、まのあたりに見たその光景は、イノックをうちのめした。イノックは身をふるわせ、よろめき、叫び声をおさえ、その場をはなれた。彼に今でできることは、神に祈ることだけであった。だがその祈りも、神のなし給うたことに対する恨みに始まる。やや気をとりなおし、このつらい局面に立っている自分を何とか支えてほしい、この場をのりきる力を与えてほしいという祈りに変わっていく。

774) And there he would have knelt, but that his knees
Were feeble, so that falling prone he dug
His fingers into the wet earth, and pray'd.

'Too hard to bear! why did they take me thence?
O God Almighty, blessed Saviour, Thou
That didst uphold me on my lonely isle,
Uphold me, Father, in my loneliness
A little longer! aid me, give me strength
Not to tell her, never to let her know.
Help me not to break in upon her peace.
My children too! must I not speak to these?
They know me not. I should betray myself.
Never! No father's kiss for me — the girl
So like her mother, and the boy, my son.'

「妻に知らすな、露ほども妻に告げまい」という言葉を、イノックは何度も何度

もくり返し、自分の生きて帰ったことを知らせまいと固く決心するのであった。彼は死ぬまでこの自らたてた誓いを守りぬいた。死期の迫ったことを悟ったとき、イノックは自分の身の上を宿の女主人にはじめて明かした。そして、自分が死ぬまで、決して口外しないでほしいと、頼んだ。その頼みは氣迫に満ちていたため宿の女主人も約束を守り通した。イノックの言葉を引用しよう。

874) When you shall see her, tell her that I died

Blessing her, praying for her, loving her;

Save for the bar between us, loving her

As when she laid her head beside my own.

And tell my daughter Annie, whom I saw

So like her mother, that my latest breath

Was spent in blessing her and praying for her.

And tell my son that I died blessing him.

And say to Philip that I blest him too;

He never meant us any thing but good.

But if my children care to see me dead,

Who hardly knew me living, let them come,

I am their father; but she must not come,

For my dead face would vex her after-life.

もしもアニーに逢ったら、いまわの際まで、
アニーを祝福しながら、アニーのためにお祈りしながら、
今はしがらみに堰かれた身だが、新婚の頃のそのままに、
アニーを恋い慕いつつ、死んでいったと伝えてくれ。

(中略)

それから、わが家の幸福をひたすら心配してくれたフィリップには、
彼のために、私がその将来を祈ったと、伝えてくれ。

(中略)

しかし、アニーだけは来させてはならぬ。

死顔を見たら、アニーは、さきざきまでも、嘆き苦しむであろうから。

苦悩にたえ、孤独にたえ、イノックは、かつて深く愛し、今も愛し続けているアニーの為に、生きた姿をみせなかった。アニーの幸せ、フィリップ一家の幸せの為にすべてを捧げた男、イノックの最後は至福の光につつまれていた。

907) He woke, he rose, he spread his arms abroad
Crying with a loud voice 'A sail! a sail!
I am saved;' and so fell back and spoke no more.

So past the strong heroic soul away.
And when they buried him the little port
Had seldom seen a costlier funeral.

このイノックの生き方、死にざまに英雄的精神を認めたからこそ、町をあげての盛大な葬儀で彼を送った。だれでもができることではない。だが、もしこんなことができたら、どんなにか気高く、すがすがしい思いに満たされるであろうか。それをやってのけたイノックへの悲しいまでの共鳴が、「伊勢物語」の立ち去っていく前夫の心境と重なり合う。

イノックの死後、彼の生還や彼の遺言をきいたアニーやフィリップはどうであろうか。それはまた別の問題であるが、賞讃で終るイノックの行為の残したものは、深い傷となって、アニーやフィリップを苦しめるのではないかとさえ思われる。

「イノック・アーデン」は自然の情景の描写の適確さ、巧みさ、美しさで高く評価されているが、今回は、「伊勢物語」の三つの場面に相当する部分をぬき出し、比較しようとしたもので、「イノック・アーデン」全体の検討には及んでいない。この三場面をとり出してみると、アニーを失ったフィリップの苦悩、夫イノックの消息不明と再婚を決意するまでのアニーの苦悩、生きてかえったイノックの死に至るまでの人知れぬ苦悩が痛いほど強く伝わってくる。だが、これらの人々の苦悩は、強く深い愛と表裏一体をなしていることも、同時に読みとることができよう。

Ⅳ おわりに

「伊勢物語」24段や、「イノック・アーデン」についての評価は両極に分れている。虚構の上につみ上げられたもの——いや、この極限の世界にこそ人間愛が高められた形で表現されているのだ、とするもの。「イノック・アーデン」については、キリスト教の教理を押しつける俗うけする純愛物語にすぎない——いや、この詩には人間の愛の苦悩、ふだんは忘れていた人間の心の奥にある意識を刺戟するものがあるといった具合である。私自身はそれぞれの作品の評価の後者に立っている。だからこそ、今回もこの二書を引き合いにして人の心をさぐろうとしたのだ。

二作品の最も相違している点は、叙述の仕方である。すでにみて来たように、「伊勢物語」の簡潔・素朴な表現・感情を交えず淡淡と事実を記す地の文と、感情のほとばしりの歌の組合せの妙。これに対し、「イノック・アーデン」は、叙述の細かさ、緻密さ、登場人物一人一人の心の動き、行為の動機やその行動の説明など、理の上に理を重ねるような表現である。前者に接するとき、数少ないことばを手がかりに、読者は想像の世界へ翼をひろげていく。自己の体験・感情・理性・理想を重ね合せ、物語に描かれている以上の世界を思い描く。後者に接するとき、「なるほど、なるほど、すべての行動はさけられぬものだったのだ」と納得する。ことばの多さ故に、殆んど自由な詮索は許されない。だが、いかに多くの言葉を費やそうとも、それらの言葉を語らせた魂に行きあたるからこそ、共感や共鳴を覚えるのだ。

イノックの生還、ひそかにフィリップの家へ行き、窓から楽しげな室内をかいまみたときの衝撃、アニイの幸せを守り通す為に、自分の生存を知らせまいとする固い決意。これに対し、「伊勢物語」の前夫は、家の中をみることもない。妻の詠み出した歌から事情を察し、妻のつかんだ幸せをこわすまいと、とっさに我が身の処し方を決める。《わがせしがごとうるはしみせよ》ということばを残し、その場を風のように去って行く。どちらの男も、愛する女の今の幸せを守るために、自らの理性と意志で、自分の愛の成就を犠牲にしている。今、理性と意志でとのべたが、愛があるからこそ、そのような決断を下すことができたのであり、この点で理性と感性は一体となって一人の人間をつき動かしているといえる。女

の幸せのために、自分を犠牲にしている二人の男は、自分達がそのような形で女への愛を貫き通していることに、苦しみの中にも、自信と誇りに満ちたりた思いをしているにちがいない。最後まで毅然としていたイノック、未練を残さずに立ち去る前夫、どちらも己のとった行動に、人間としての最高の矜持を覚えたであろう。この点で二人は、すでに愛の報いを得ていたといえる。ただ、このような行為は、だれでもが簡単にとることはできない。並の人間のできないことを作中の人物がやってのけてくれた。読者はそこに共感し、感銘し、日ごろは忘れている人間の高潔さにうたれる。

イノックは本当に自分の死をもって愛を完結させたようにみえる。だが、イノックの死後、これを知ったアニーやフィリップの心情は平穏でありえようか。おそらく別の苦悩の生活が始まるであろう。イノックの自己犠牲の愛はその深さ故に、愛する者へ別の犠牲をもたらししていくのではないだろうか。「伊勢物語」では、前夫の愛を知った妻はついに、自分の命をなげ出すことで、夫の愛に応えている。誠に悲しい循環の中にいる人間である。この種の問題は、人間の存在と共にあり、古くて新しい問題である。さけて通ることのできない問題である。ふだんは、無意識のうちに、みすごしている人間の意識を、この物語は白日のもとに引き出し、人間の可能性と、人間の行動の限界について思いを深めるきっかけを与えている。

注1 笠間書院刊 校注「伊勢物語」による。

注2 「伊勢物語」の本文からの引用部分は《 》で示すことにする。

注3 『戸令』によると、「すでに成るといえども、その夫外蕃に没落して、子有りて五年、子無くして三年帰らざるとき、及び逃亡し子有りて三年、子無くして二年、出でざる者は、並に改嫁をゆるす」とある。

注4 「イノック・アーデン」の英文は

開文社 「ENOCH ARDEN and OTHER POEMS」によった。

訳文は 岩波文庫「イノック・アーデン」テニスン作、入江直祐訳によった。